

戦争の惨禍の継承を思う

伊豆の国市遺族会 村越興次

令和3年の政府主催の全国戦没者追悼式に、初めて戦没者の配偶者の参列がなかった。遺族の高齢化と新型コロナウイルス感染対策のため規模縮小し行われた追悼式、英霊の皆様にはさぞ淋しい思いをされたことでしょう。

父は、南洋パラオ島にて終戦を迎え帰還船を待つ間に戦病死しました。父亡き後の一家六人がたどった道は、悲惨と苦労の連続でした。母一人での働きでは六人家族の生活ができず、私は叔母の家に、兄と弟は父の実家に預けられ、家族はばらばらに。ようやく、昭和27年に一家そろっての生活ができるようになりました。母が一番苦労した時期でもありました。

私はその母の苦労を身を持って知り体験しているので、今でもあの母の苦労した姿は一日たりとも忘れたことはありません。その母も、平成元年に80歳でこの世を去りました。

これからも、2度と戦争の惨禍を繰り返さないことを、後世に継承していくのが今を生きる我々の務めです。

私の思いは、今こそA級戦犯を除く310万人の英霊が眠る、国立の戦没者墓地を作るべきだと思っています。誰でもがお参りができ、平和を願う場所があっても良いのではないかと考えています。先の大戦の犠牲者の上に平和が成り立っています。戦争の悲惨さを後世に継承する意味でも作る意義がある。

靖国とのしがらみもあり実現は難しいと思うが、遺族としてはそれくらいの夢は持ってもいいのではないかと。

私の終戦と戦後について

伊豆の国市遺族会 水口一弘

私は昭和18年生まれであり、終戦を迎えた昭和20年8月には2歳になる少し前でしたので、戦争のことは何も理解していませんでしたが、物心つく頃から、まわりの皆は父親がいるのに、自分だけ父親が居ないのが不思議でした。少し経ち、父親は戦争に行き未だ帰らぬことを知りました。それからは父が早く帰る事を心待ちにしておりました。

母は、父が残したミカン山を一生懸命守っておりました。幼い私には何も解らない事でしたが小学校に上がるころから、母を手伝いミカン山へ草刈りやミカン取りに行った記憶があります。帰りにはミカンを、背負い籠一杯にして担いで帰った記憶があります。そんなある日、近くの子供達が（父が帰って来た）騒いでおり、母が「ほんと」と言い目が輝いたのをはっきり覚えております。しかしそれは私の叔父であり、母の弟が訪ねてきたただけでした。後に分か

ったことですが、私の父は昭和19年12月に徴兵され、旧満州国に行ったそうです。父の戦隊は昭和20年8月14日に全滅したとのことでした。それでも母は戦死した事が受け入れられず、父はきっと帰って来ると信じて待っていたようでした。私が小学校二年か三年ごろ、ようやく母もあきらめたようで、父の戦死を受け入れたようでした。

そして我が家に届いた戦死公報には(昭和20年8月13日旧満州国において戦死)とありました。何も知らない小学生の私は、その時「戦争がもう3日早く終わっていたなら、父は生きていたのだ、なぜもっと早く終戦にならなかったのか」と心の中で叫んだのを鮮明に記憶しております。

戦争で私たちは一番大事な父親を失ったのです。私は戦争の記憶はありませんが、子供のころの、体験と思いをつづらせていただきました。

あの戦争は何のためか

伊豆の国市遺族会 滝口久富

先日の深夜、「なぜ、主婦達が太平洋戦争に係わってきたか」についてTV放映があった。NHK制作だった。

お国のためにと、自分が育てた息子達、かけがえのないご主人を戦場に送り出す光景、今考えると、本当におかしい。赤紙が来たからと、生きて帰れる保証がないのに何故万歳に送られて出征したのか…、近所中がどの家族も楽しんで送り出しているかのように見えた。おかしい。そうしなければ残った家族は生きていけなかったのか。

母が、姉が、弟が好き好んで送り出しているはずがない。戦場の状況も解らず、又、何の目的で戦争をしなければならないかも知らずに、この戦争は本当に必要だったのか。

私の父は薬剤関係の仕事をしていた関係か、衛生兵として任務に就いていたようだ。終戦後、帰国中に病死したと聞いている。負けた戦争なので、帰国もそうた易くなかっただろう。難渋を極めたに違いない。

親戚の結婚式や法事で父の生前の様子を耳にすることがある。父は御殿場出身、沼津に出て、薬屋に勤め、店を任されていた様だ。親戚の者もよく沼津の家を訪ね、そこから職場に通ったとも聞いた。戦争でその家も焼失し、母親の長岡の実家近くに疎開、その頃の記憶が少し残っている。しかし父の顔は記憶の中にはない。

母は百歳と長い人生であった。戦争についての話を聞いた記憶は無い。

毎日せつせと子供達のために仕事に通っていた。定年後は姉夫婦と一緒に暮

らし、ごく普通の、毎日変わらない平穏な日々を過ごした。そのことが、少なくとも良かったと思う。

戦後 20 年間は復興の名のもと、ただ働くだけ、その後は平和で平穏な生活に浸り 50 年たった。

何の戦争だったのか、何でそんな戦争のために多くの人が亡くなり、苦勞したのか…

平和っていい。何ていっても平和がいい。